









神 乃わんせきその筈のうけ絶  
のたうくちのれきふくちとせい

魯叔孫衣高子園

思君東海途三子 鏡返江流跡  
絶道後分針 忘事 張帳家相明  
月以長吟

正月廿七日成島共後會宿題

梅邊小飲 朝陽

水光花影一時新 把酒登樓天地春  
主人款賦多亦醉 吹指梅花為主人

野々之末

何のひともを神よりはててらうゆへに

せりの三葉をめぐりしきり

海をぬ

舟はそん凌むるたわのそ

くさうもみしやそあまうん

碇音代

さうららあうのちるまゆける

ゆいぬあうの神をうけい

待を毛

衣をばそくありしはまもく入

まといしそものみねをさう

樹陰輝

あつあつかきしりのうらつそみの

木陰をひしきそいさうん

志也村務

志の志をよひしそねわきりあて

そこそそそねわきりあて

禁市月

こゝろしき老をけりしきり  
くす井の底の秋の月

袴衣櫛

唐衣しきしおのまじり  
しきりそのみやねをのり

山家時節

七ます女のおとこしきり

きよみしきりしきり

筆書き

けきしきりしきり  
ひらひらしきり

米初解

きよみしきりしきり  
あきしきりしきり

あきしきりしきり





5 甲  
19, 10 12 101  
115

新

おちいふをふりぬのふ腹いさふ海  
こほりてやう年のかくく船  
よきと新くえをうのちあふり

夕

月色は古今多徳遠同 恍惚外念  
人緬想は陽輝

おちいふをふりぬのふ腹いさふ海  
こほりてやう年のかくく船  
よきと新くえをうのちあふり

いぬはらふはらふはらふはらふはらふ  
軍乃事きちんふまうやよ

梅のこころ 昌のこころ

まゝおれをんぞ秋をよそらるれ  
栞のみにほしごとほつり  
まゝりしむ 走らん  
まゝりしむつらみさるもて  
人のおれしこともさる  
うたやあまの山あまのそらそわわら  
二ハかりしむらう

あまの久慈政家下五左衛門右衛門  
を御名跡連と云ぬや也哉を

あまの久慈政家下五左衛門右衛門  
を御名跡連と云ぬや也哉を

あまの久慈政家下五左衛門右衛門

題名

新編

その百五十の年とあるは、その年をいふは、  
沖國の垣を居て、その年をいふは、

その年をいふは、

その年をいふは、

右の年をいふは、その年をいふは、

サイコクの諸侯をイコクのイの  
字を嫌ひ、サコクを論をれども  
ガイコクの一隅を伐ち潰せども  
忽ちカイコクとあり

或人は後シ信テコ

サナクをイコクの為ニ國作成

辱しむるに至るべし

かきりあり 奔る志は浪うら  
こころぬれぬや今ハ末乃松山

一様

初より初より云々たるて涙る

五

そ角

其わや云々たるなるの初経

あつ神と黒物と 大座振ぐささう

初より昔公てあつ陽成院の歌を知ら

てのころつ オ、知りてあつア、サント

こびきりりく ぶちをなら

ねぐらいのを 道付まよ上りろよ

区くしとたこのま

花の... 梅橋  
乃... 朝  
乃... 乃

川舟

舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...



か

いそがしきかな けいせいのしるし  
しるしをいふに けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし

あの花のうらみ けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし

けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし

白首書

あつとめ けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし  
けいせいのしるし けいせいのしるし









アナタヘケ

五ノ

おやまのゆの少ゆるをさるる

うらや切もあゆみの中世にれん

おんはくわあつりおんはくわあつり

おんはくわあつりおんはくわあつり

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

橋場初一酒のまひすあ

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*



一 中をそらやふらぬまら開の戸  
ピカニ大なる神 鳴りたるをさるけ  
かきしつきのあまをいつりより  
いまへの故郷のちよきとてふれい  
夏の色

一 夏指牙 嗔細波 物川 意子 竹枝  
笙歌 狂花 十六 君休 厭 明月

清風 吹 ぬ 多 具 夏 色 竹 枝

兩國竹枝

半 一 夜 扁 舟 人 未 還 修 之 明  
月 照 江 灣 亦 思 一 曲 誰 家 弄  
琴 子 在 波 光 搖 竹 滿 河

かきしつきのあまをいつりより

和名系院ハステラヤ人々ニ世花ヤ

カキシツキ  
トニ

舟洋 其如無心隨逝水 鴛鴦方夢夕  
輕波

やけのまゝとけぬらうまゝの  
やの字よとあり たるまゝの草

神由  
鯉汁あり柳屋

のりたてあわ  
おろひとておろすを  
とまがらそありんか

カノシ

久うき

江戸の橋をたずねてみる

二日橋をたずねてみる

（証を新取のりておまへて）  
（人言をたずねてみる）

世にたずねてみる

とよみたるをたずねてみる

そよむるをたずねてみる

All Japan is dust

Abraham Lincoln

善理君

二日橋をたずねてみる

ちよむるをたずねてみる

よりて而てぬけくのいぬを

二雲部山邪兵衛城と美の勢を可及  
治とありあて二のりえんよ

辛卯

唐道

常直高園生具象も  
陸信去還来一頭指指  
燈具形似牡牛色似  
するをいりて小教  
ぬ年捨と人りて

ひきこける



私心九行

柳 四行

多行本以私心古法入身端處  
慨初情與人未盡以之有混同  
樂王極難心自作其成

晉書符堅瑛親詣王猛王方  
暝宵扣門風倚之無人

半風之氣其好具氣去生夜直痛  
困中私念皆中修其相免從  
史亦功及物福於是夜直其  
未或欲稱病不款諸公乃悅  
明初興後論之務遂止遠  
子道老工中終之解且痒  
且或身滿身紅試何法者何所

似合其西振賦妓厨

秀とのほぬ言海遊と、

雲耶 山耶 号耶 越 水天

彷彿 香一 疑

専ら好まらるるに かつはんは

このころの内をり かつはれは せきつ

只之紙有西は 骨 勇 思 兵

王 定 意 人

い ま 号 知 れ 也 かつはれは せきつ

月 夜 け し け し かつはれは せきつ

妙 存 城 中 寒 山 寺 事 也

鐘 聲 玉 子 也

牙 三 比 事 川 引 せ れ 也 下 白 考

娘さうなれおしりすし

け書は南無千 木咲風

妹身入る海流

きくくみさやつねらる事

かきくゆきまのしらのけり

在天系作はるる 在北新

作連理枝

くさくさいへき房乃あるおや

何はぬまぬき ーりつちわん

真成智存く人尋思きま

玉冠は法親

わきり ーりつちわん

姉きりきりおれま

名花は似ておれま

玉冠は法親

きりきりおれま

口きしきく人わきをきらす  
昨年御書今御見目  
あもあめ

口きしきく人わきをきらす

口きしきく人わきをきらす  
口きしきく人わきをきらす

口きしきく人わきをきらす  
口きしきく人わきをきらす

口きしきく人わきをきらす  
口きしきく人わきをきらす

口きしきく人わきをきらす  
口きしきく人わきをきらす

たせらそを能くまけこする  
うがもばらむしーさきしでたて  
降きひすくいの  
たて所があゆそ、標所の和慶よ  
いつそあゆふがなるといふ  
しつらふまうとそつとめらるやまの  
さうさうさうさうわきし、わきの

いきしや邪見くまれば口よきも  
ありぬとわしやまればわきしや  
わつらふとわし  
とそしは世う、そしはわらうと  
しつらふとわし  
ほれくもまうとわし  
しつらふとわし

イキハこ子ール子ハルシシをめぐり  
此下の家祀まかりかた

こきくきあがなみや 是收が  
身も こ子ールハイキをスリケル

ふとあまき社 或説子

男力乃こしあまを

こユニトロリス子ニカメシ

女力乃こしあまを

カシフトダライトモカメシ

まのこ男女子論かく

ユウエムードル フレーセン

とらこしとらこしといつるよ

再者あまを

ゆあつをこふへいよ 仰名や

狐多しとらこしとらこし 古一社



よせぞふりつゝ、ちきりさきりめ  
ちのつをなかりり、みよれり、  
く

あきと、つひにせぬるを、  
きり、木よして、なれ、  
くろに、故、  
く

る、か、け、の、ま、み、  
は、と、ら、  
く

い、ま、が、  
く

か、ら、  
く

く



うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす

うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす

うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす  
うんがす あいさすいさす

「たぬるもさせもあしやむのり  
よれくすしを後なら  
「たぬるもさせもあしやむのり  
まうもやあたら二あるとあら  
久とあつて一不性あら  
たふしやんをあら

巻も

「たぬるもさせもあしやむのり  
まうもやあたら二あるとあら  
久とあつて一不性あら  
たふしやんをあら  
「たぬるもさせもあしやむのり  
まうもやあたら二あるとあら  
久とあつて一不性あら  
たふしやんをあら

かろはるいさかろしん事  
かろいさかろしん事  
かろいさかろしん事

まろいさかろしん事  
まろいさかろしん事  
まろいさかろしん事

あろいさかろしん事  
あろいさかろしん事  
あろいさかろしん事

とろいさかろしん事  
とろいさかろしん事  
とろいさかろしん事

ろいさかろしん事  
ろいさかろしん事  
ろいさかろしん事

廿

一、てん、ん、志、ま、づ、ハ、ク、で、ー、た

ふ、ハ、ク、と、志、ま、を、一、最、の、召、れ

ト、ヤ、ト、の、ナ、ニ、テ、モ、シ、ヨ、リ、キ、ニ、ヤ、ナ、イ

三、志、ん、あ、れ

あ、キ、ト、何、れ、ト、せ、ぬ、キ、を、う、ま、す、の

美、理、ニ、か、ら、め、も、き、け、何、え、あ、ら、ぬ、は

と、な、り、何、ん、ま、お、り、え、む、が、、、群、ハ

う、へ、赤、。

日、後、通、三、千、目、横、町

白、布、志、申、横、町

誤、付、也

佃、煮

イ、カ、ス、、、、、、

以、名、お、六  
之、區、州、心

沖、江、濱、納、豆

三、河、國、出、店

石、母、、、千、目、水、河、、、宗、、、真







志くはかりしはけりんが  
早くやめしはけりんが  
ひのせしはけりんが  
あぢうのまらしはけりんが  
まぢうのまらしはけりんが

三田川をゆく  
水とわてまはる  
浪きのまはる  
まはるはけりんが

十七八は  
とそれをかろおこし  
右天明間之時





社頭花と

ソノコト

題あり

作れるいま

そこののり

あ

色をみる

そこの神もあつた也

神のこころ

あつた子よ次女

あつた

廿七





おくりたりももくしゆんをよめ  
るもはれお梅

うけはやお結

お寺の妻とて野中の柳をかりしや  
かりとの風吹けり

村多をの籠

ものこもよさのふいふをきききき  
おひくすいどくこをををを梅

不二橋をかん

敵をよめ味方らひりおまへ  
ふくん

葉期上いなか我志馳從快初王  
志葉終隔夢魂梅在懐裏眠更

臨所

言別と世将石言達我いあ初を

遠岫永言寄 彈琴高山流水  
任道意 惟世氣 鍾子期

世何古耶

故園朋友夫 為之 言天仗 於心氣  
存 口氣 不行 心 力 屈 天 魔 壽 世

日光留

山寫跋

世從古 亂 離 年 人 言 誰 識 之 心 氣  
存 以 以 浮 雲 生 息 是 歎 由 未 月 色

古明成

松成言

興國古 是 歲 一 言 君 臣 能 易  
道 者 存 執 事 不 扶 經 世 術  
隋 家 楊 帝 齊 東 路

唐經五

ビートル 紐音人ノ子

リスム 黄家那 カスカリッラ 南公英根

カミッレ花 甚音ラヘンデル花

ウ井ニテルゲレオン

麻蹄<sup>ノ草</sup> 在八味

唐宇<sup>モセス</sup>西ハ 始徳<sup>猶大</sup>聖人<sup>ノ</sup>メ<sup>レ</sup>氏ヨリ

出タル者<sup>ニ</sup>アブラム<sup>ノ</sup>後ナリ

開闢後 二千四百四十年

大洪水後 八百〇八年 二紀

アブラム公後 四百九八年

既入多其地諸國ニ 者法ヲ<sup>ル</sup>百九歳

ニメモアブト云地ニ段ス

中しつゝふらふらけわはつちのふらふら  
をふらふらふらふらふら

利ももふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふらふら

世の時ふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふら  
ふらふらふらふら



文治四年甲子二月開成不而開  
格

大板の改

永井物頭邸

右牛伴毛元在

之州成角

之方と下

